



オリンピックと男女共同参画

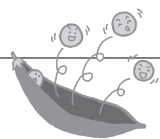
この夏、イギリスのロンドンで第30回夏季オリンピックが開催されました。2014の国と地域から約1万1千人の選手が参加し、26競技302種目で熱戦を繰り広げました。

女性が初めてオリンピックに参加したのは、1900年にパリで開催された第2回大会のことです。当時は男性の競技が主で、女性の参加競技はわずかでした。しかし、会を重ねるとともに女性の参加する競技は増え、今回のロンドン大会で新たに採用されたボクシングを含め、26競技の全てで女子競技が実施されました。中には、新体操やシンクロナイズドスイミングなど、女性だけで競われる種目もあります。

また、オリンピックには「馬術」と「セーリング（の一部種目）」のように、男性と女性が区別なく競技する種目もあります。今回のロンドン大会では、これまでイスラム教の戒律に基づき男性しか出場させていなかったサウジアラビア、カタール、

ブルネイが女性選手を派遣したことで、オリンピック史上初めて参加する全ての国・地域が女性選手を派遣し、参加標準記録を満たしていないなどの理由で参加できなかったチームもありましたが、女性のスポーツ参加において記念すべき大会となりました。

さて、皆さんも今大会の日本選手の活躍に胸を躍らせたことと思います。日本からは全293人の選手が参加しましたが、その内訳は男性137人に対し女性156人と、女性選手の方が多く参加しました。メダル獲得数は実施競技のうち半数の13競技で、過去最多の38個となりました。個数では男性が21個、女性が17個という結果でしたが、銀メダルを獲得した女子サッカー（なでしこジャパン）、日本卓球界で初のメダルを獲得した女子卓球、28年ぶりにメダルを獲得した女子バレーボールなど、女性選手の活躍がこれまで以上に目立った大会という印象を持った方も多かったのではないのでしょうか。



健康まめ知識

新たな国民病「CKD（慢性腎臓病）」をご存じですか？

■CKDってどんな病気？

慢性に経過する腎臓病のことをCKDといいます。現在、日本の成人の8人に1人がCKD患者で、新たな国民病といわれています。生活習慣病（高血圧、糖尿病など）や、メタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）との関連も深く、誰もがかかる可能性がある病気です。

腎臓の機能が低下し続けると、血液中の老廃物や水分を体の外へ出すことができなくなり、透析が必要な状態になることがあるほか、心筋梗塞や脳卒中などのリスクも高くなるといわれています。

■CKDの症状は？

CKDは、初期の頃には自覚症状がほとんどありませんが、進行すると夜間尿、むくみ、貧血、倦怠感、息切れなどの症状が現れてきます。これらの症状が自覚されたときは、すでに進行している場合も多いといわれています。

そして、腎臓はある程度まで悪くなってしまうと、自然に治ることはありません。

■CKDを早く見つけるには…

年に1回は特定健診などの健診を受け、血液・尿・血圧の検査をすることが早期発見につながります。

特定健診は、糖尿病や高血圧、脂質異常などの生活習慣病の発症や重症化を予防することを目的として、メタボリックシンドロームに着目した健診です。必ず受診しましょう。

— 特定健診 —

40歳～74歳の方を対象に、加入している医療保険者が健診を行います。  
※75歳以上の方は、ぎふ・すこやか健診の対象となります。